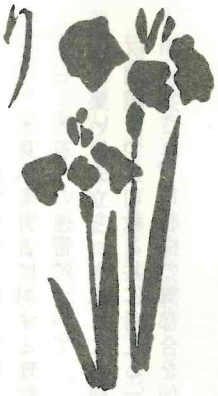
仙台司教区 教区事務所だより



（第　43　号）
昭和56年5月1日

教区目標に具体的に取り組もう〜〜〜

「家庭を通してキリストの愛をひろげよう！」

少しおくれましたが、仙台教区の皆さま方に、もう一度〝ご復活おめでとう〟と申しあげます。ご復活徹夜祭で洗礼を受け、私たちの新しい兄弟姉妹となられた方もいるでしょう。また、私たち信者はそのとき、洗礼の約束を更新して新しい信仰生活にふみ出すことを誓いました。いまはそのときです。仙台教区も私たち一人びとりも、気持ちを新たにして、ことしの活動を開始するときです。

先日、4月3日付で仙台教区長・佐藤千敬司教様から四旬節教書が発表されました。すでに各教会に送られましたから、皆さま方はご存知のことと思います。「家庭を通してキリストの愛をひろげよう」と題されたことしの四旬節教書は、そのまま仙台教区の司牧的年間目標であって、司教様はその実施促進に具体的な示唆を与えてくださいました。ここで改めて司教様の願いを明らかにし、私たちがなにをしたらよいかを考えてみましょう。

教書の中では、私たちが周囲の人びとにひろげてゆかなければならない「キリストの愛」を、もともと生き生きとした、活力あふれるもの（教書ではダイナミックと表現しています）と考え、信者はその溢れる愛にみたされ、導かれ、生かされてゆかなければならないとしています。要するに私たちは理屈ではなく行動でもって、しかもその行動は信仰から来るやむにやまれぬ心の動きによって、福音の精神を他の人びとに及ぼしてゆくのです。司教様はそのためにこれまで学んできたことや実行しようとしたこと、すでにはじめたことをさらに熱心につづけるよう願っています。

以上のことを教会（信者一人びとりだけでなく）として確かなものにしてゆくため、いくつかの具体的な勉強をのぞんでいます。それは①先日、教皇さまが日本で私たち信者に話されたことをよく知るため、小教区でグループを作ってみんなで勉強すること。②「幼児洗礼に関する指針」を司祭と共に研究し、子供の信仰教育のことを勉強すること。③以上の勉強会、その他の集会を小教区教会全体だけでなく、教会隣組や家庭集会をもっとよく利用すること。その場ではもっと日常生活にふれた話し合いを多くして活力のある信徒の集まりにすること。

その他に大事なこととして、国際障害者年にあたって信徒のなすべきこと、キリスト者として自分だけではなく世界やアジアに広い目をむけることをのぞんでいます。

私たちが福音のこと、教理のこと、そして教会共同体のことを十分に、しかも正しく理解して成熟したキリスト者になることを教皇は今回の訪日でつよくのぞまれました。

司教様の日程

（4月16日現在）

5月9日　司教協・財務小委員会（東京）
10日〜13日　女子修道会総長管区長会（山中湖）
15日　司教協・財務小委員会（東京）
16日　スペルマン病院理事会
18日　男女修道会合同委員会（東京）
19日〜23日　司教会議（東京）
25日　教区司祭団月例会
31日　後藤寿庵祭（水沢）
6月1日　教区司祭団役員会
4日〜5日　神学校常任委員会（東京）
7日　聖霊降臨主日・堅信式（元寺小路）

仙台教区
第八回司牧評議会定例会議

昭和56年3月21日（土）午後一時から、仙台・元寺小路教会・信徒館において司牧評議会定例会議が開催され、次の議題が討議された。出席者は、佐藤司教以下20名である。

議題一、昭和56年度仙台教区司牧的年間目標について。テーマ「家庭を通してキリストの愛をひろげよう」

① 教皇様の訪日によってもたらされた、カトリック教会への理解を足場にして、信徒は積極的に外へ出る（宣教活動をする）ことが必要と思われる。

② 昭和55年度の統計によると、仙台教区の信者総数は、一二三四六名である。その約半数の方々は、教会に接触していないと考えられる。そこで、その方々に対して、家庭を通して働きかけてはどうであろうか。

③ 外へ向かうという発想はよいが、その前に内側をもっと充実すべきである。すなわち、家庭のあり方こそ最も重大であり、その際、夫と妻の間の賢明さが一番最初に要求されることである。

④ より近きより、より遠くにということから考えると、教会内において、互いに真剣に話し合えるようにならなければいけないのではないか。

議題二、信徒に与えられているカリスマの養成について。

議題にある「カリスマ」の用語について疑問が出され、司教様から、「洗礼や堅信というカリスマを与えられている信徒は、社会や教会において各々の役割があるということです」との説明があり、「カリスマを与えられている信徒の養成について」と議題を改めることになった。上記のように、議題の内容がよく浸透していなかったのは残念であった。

議題三、カテドラル再建の具体策について

三浦神父から、「カテドラル建設計画を理解していただくために」という、カテドラル委員会でまとめた趣意書が読まれた。その結果、まず出発点として、この趣意書を正式なものとして全教区に配布することになった。

福島県
カトリック連絡協議会開催

福島県連絡協議会56年度第一回の委員会が郡山教会で開かれた。各教会から代表22名が参加して、次の議題について協議した。

●昭和55年度会計及び事業報告と、56年度予算と事業計画について

●昭和56年度「カトリックの集い」について

集いは、9月15日（敬老の日）平の予定

テーマ・教皇来日の意義について

・司教書簡の対応について

・身体障害者に対する理解と協力

・若人の連帯について

この集いに先立ち、有志による練成会「教区問題につき司教と共に考える」を行う事が提案され、司教様の御都合を伺うことにした。

●司牧評議会に対する意見について

この事は、信徒全体の声を反映させるため、各教会からの意見を求めることになった。

●広報委員会について

広報委員を各教会毎に選出することになっているが、不徹底なので、決まっていないところは早急にきめて、「県の集い」その他の広報に協力していきたいと話し合った。

～現代人にみことばを～

＜青森県宗教教育指導者講習会＞

去る3月24・25の両日、青森・浪打教会を会場に宗教教育担当者の研修会が司祭13名、修道者13名、信徒10名の参加のもとに行われた。

講師は、東京・コロンバン会のグリフィン神父と、アシスタントの吉田礼子さんで、長年の宗教教育の研究と実践の結果を分かちあって下さったものである。

内容は、日本人には、予備宣教的素地が大事という事から、人間学、心理学的なものを盛り込み、まず人間とは何かという点に焦点を当てる。その後、福音宣教を中心にキリストとの出会いに導き、最後にカテケジス（信仰教育）が展開される。この一連のキリスト教講座は、視聴覚教材や、多くの作業を通して行われ、自然な形で、自己と神へ心を開いていくよう導かれている。

今回は第一部の予備宣教の部だけだったがこの研修を更に続けたいとの声が多かった。

カトリック・ボランティア リーダー全国交流会

３月20日から３日間、「カトリック・ボランティア・リーダー全国交流集会」が東京で、カリタス・ジャパンの主催で行われた。仙台教区からは、本間神父と２名の信徒が参加した。

「使徒職としてのボランティア活動」というテーマで会が進められたが、基調講演では、チネカ神父（大阪）が、「信徒はすべてボランティア」と強調。神と人々との間に立ち、パートナー精神で愛の業を実行しようと訴えた。

全体会では、各地区の活動が報告されたが、特に車いすで参加した二人の身障者は、自らしているボランティア活動を報告。身障者の使徒職という点で、ボランティアの神髄を考えさせるきっかけとなった。

今後全国のボランティア活動の連帯を強めるため、連絡協議会設置の動きがあるので、仙台教区でも、その動きに答えるべく準備を進めている。詳細は、本間神父まで連絡を取られたい。

男子黙想会 八戸で！

去る２月10日～11日、八戸塩町の文化センターで、男子の黙想会が村首（ムラカベ）神父の指導で行われた。テーマは、「キリスト者の課題」〈家庭・職場において〉であり、３回の講話とディスカッションがあり、塩町、鮫、大湊の各教会から19名が参加した。

村首神父のズバリ歯に衣を着せぬ話し振り、参加者の心にグサリと突き刺さる語句の連発。

アルコールの入った親睦の夕べと、完全沈黙の黙想とスケジュールにも工夫があり、いろいろ考えさせられる黙想会であった。これを機会に年に一度は定期的に開いていきたいと考えている。指導して下さった村首師と会場でお世話下さったウルスラ会修道院に厚く御礼申し上げます。（塩町教会・藤村重実記）

高校生会黙想会

〈元寺小路教会〉

春浅い去る３月14日、３泊４日の日程で、元寺小路教会高校生会の黙想会が、白石教会（首藤神父）で行われた。20人の高校生は、自炊をしながら、ウラール・ニボン神父（会津若松）の指導のもと、「幸福に生きるには」「愛」の二つのテーマに沿って、講話、黙想分かちあいという形で進められた。最後の日は、フィナーレを飾りスキーに行き、思い出深い黙想会となった。

召命祈願日……５月10日

召命を祈り
出し求める

主イエズスよ、
あなたの聖なる弟子である司祭、
英雄的な宣教師、
熱心な修道女を待ち望んでいる
世界各地のあなたの刈り入れに、
働き人をお送り下さい。
若い人びとの心に、
召し出しの熱望を起こさせ、
燃え立たせてください。
キリスト者の家庭が、
あなたの教会に、
未来の協力者をささげることによって
献身的な信仰生活の手本を、
輝かせるようにお導き下さい。アーメン

（教皇ヨハネ23世）

性教育に取り組む……白菊学園（八戸）……

―早坂養吉氏の指導で―

白菊学園高等学校では、８年程前から、性教育の必要を感じ、図書を購入したり、全国の研究会に出席したりしてきたが、聖ウルスラ学院で、早坂先生の指導を受けていることを知り、氏に依頼。年に２回来八され、学校だけでなく、教会、幼稚園父兄との交わりを持つようになって久しい。

今回は、２月12日、卒業生を対象に性教育が行われ、普通は、赤面しながら聞く専門用語や解説にも熱心に耳を傾けていた。

これも早坂先生の独得なユーモアと人柄によるもので、まさに人徳の致すところである。

次の日は、イメルダ幼稚園の父母に対して「幼児期における性教育と両親の態度と心構え」について講演。200人の園児の内180人の父兄が参加したこともさることながら、２時間という時間もあっという間に過ぎ、まだもの足りないほどであった。（藤村重実記）

おらが教区

仙台司教区統計 雑感 (一)

去る3月、一九八〇年一年間の仙台司教区現勢調査がまとめられた。統計というものはその性質からして、目に見える形で現れ数量的に出すことのできるものを集計するのであるから、地の塩・世の光、あるいはパン種として人がそれと気付かない所にも働いている教会の姿を余すところなく示すものと言うには当然無理がある。一方、存在していることのあかしというか、活動したことの結果・成果がどのようなものかを一応まとめておきたいと思うのも自然なことであって、こうしてそこに出てくる数量は教会のあるがままの姿を知る上で一つの目安となることも否めない。だからその数字は、それを読みその意味を斟酌しながら、もっと生き生きした教会のあり方を求めてゆくための、また具体的な活動の方向を考えるための、踏み台となることもできるものであろう。

さて、司教区内の総数については4月号の事務所だよりに表として掲載された。それよりももっと詳しい県別・小教区別の統計表が実は別にあり、それはわら半紙7枚の量で各教会主任神父様宛に一部ずつ届けられているので、信徒の方々で司祭館をお訪ねの折にでも御覧になった方もおいでだろう。今回はこの詳しい方の統計表をまとめていての雑感を記したいと思う。

		宮城	青森	岩手	福島	計
教会数	A	8	6	3	8	25
	B	9	7	11	6	33
信徒実数	A	3.063	1.704	972	2033	7.772
	B	978	514	1.160	457	3.109
世帯	A	1.040	778	442	723	2983
	B	446	269	602	177	1.494
求道者数	A	76	49	10	136	271
	B	27	16	23	10	76
成人洗礼	A	43	34	15	27	119
	B	5	2	7	0	14
幼児洗礼	A	34	14	9	26	83
	B	14	2	6	3	26
結婚	A	32	14	8	17	71
	B	5	7	8	2	22
転入（教区内から）	A	56	20	27	15	118
	B	8	4	22	4	38
転入（教区外から）	A	57	39	19	42	157
	B	4	4	11	26	45
転出（教区内へ）	A	51	22	24	13	110
	B	3	3	36	1	43
転出（教区外へ）	A	58	48	24	97	227
	B	9	17	12	8	46
幼稚園数	A	8	8	2	8	26
	B	6	8	10	5	29
園児数	A	1.674	1.475	310	1.388	4847
	B	735	1.287	1.482	728	4.232
小学校以上の教育事業	A	11	4	3	9	27
	B	0	0	0	0	0
社会福祉事業	A	7	7	0	1	15
	B	4	0	2	0	6
教会学校児童	A	334	190	68	337	929
	B	107	129	263	211	710

その表を見ると、ずい分とゼロの数字が並んでいるなあと誰しも思うはずである。そしてそれはちょっとした偏りをもったものであると気付くであろう。

仙台司教区内の小教区は、分教会も入れて58である。司教区内の総人口七、〇七〇、七一四人に対して信者総数は一二、三四六人。この信者総数から居所不明者と聖職者を除いた信徒実数は一〇、八八一人。県によって違いはあるが、その分布はいわゆる都市集中という社会現象と軌を一にしたように偏りがある。教会（建て物）が建てられたのはまず人口の多い都市部においてであって、その教会を足場にして周辺部に布教が行われ、信者が増え、増えた所に新しい教会が建設されるという経過から、この偏りのあることは当然といえば当然なのかも知れない。

勝手ながら、今人口十万人以上ということを基準とすると、仙台司教区内には十市（青森、八戸、弘前、盛岡、仙台、石巻、福島、郡山、いわき、会津若松）ある。で、この都市群をAとし、それ以外の市町をBとして、教会活動に関する数字で現れるものを比較してみると右のような表となる。

Aに属する教会数は25、その信徒数全体はBに属する33教会の信徒数の二・五倍である。実際には各教会に違いが勿論あるが、平均するとAでは一教会三一〇人、一方Bでは九四人強。この所属信徒数の多い少ないは、それ自体が良い悪いとは言えない。前述のように

このような状態はあたり前であろう。ただ、教会の動き、たとえば秘跡や転出入を見ると、AとBでは大きな差のあることが歴然としている。いわゆる大きな教会では動きが活発で、つまりそれだけ都市部の教会には人が集まり、それが数として現れ、中小の市町の教会では0という数が連なることになる。それにしても、成人洗礼がAでは一一九、Bでは一四というのは大変な違いだ。ということは、宣教のし方や社会に浸透してゆく具体的なあり方にはおのずと違いがあるのだろう。あるいはあるべきなのかも知れない。たとえば迎えると出掛けるというような。この辺のところどうしたらいいかということは司祭がまず頭を悩ませている点であろう。また信徒の移動については、Aでは多くて落ち着かないという現実的な悩みがあるかも知れないが、逆にBでは、変化というか外からの風が入らない停滞した感のする恨みがあるかも知れない。その両方のためにも、小教区ということにとらわれない互いの交流・協力がもっともっと求められるのではないだろうか。

教育事業を見ると、小学校以上短大までの学校は全部がAの地域にあり、Bには一校もない。幼稚園に関しては、園数も園児数もAとBほぼ伍するような形である。Bの教会にとってこの幼稚園教育を通してということが福音の精神を広めてゆくために力を入れる場となるであろうし現にそうなのであろう。ただ、幼稚園で植えられた種が枯れたりふさがれたりしないため、より成長させるためのアフターケアみたいなものが（AもBも）必要ではないだろうか。その一つの方策に教会学校が考えられる。そしてその児童数を幼稚園児数と比較すれば、現状は、少ない、と考えられはしないか。

雑感として勝手なことを書いたが、これに対して批判なり意見なりが多々起こるであろうし起こって欲しいと思う。たとえば、このAとBに分けることには意味がないとか、その評価のし方はおかしいとか、数を問題とすることがそもそもけしからんとか・・・。みんなで教区のことを考えるために声を出して、もっと卑近なことを言えば、教区だよりの係りのシスターが「原稿がない原稿がない」とボヤいているので、この事務所だよりを盛り上げてゆくためにも、どんどん投稿して欲しい。

おわりに4月号の統計表の中で訂正を一つ。教会学校児童数の中、未受洗者数一〇三四を一、一二九に、従って、合計は、一、五四四を一、六三九となります。お詫びして訂正します。

（平賀徹夫）

《読書案内》

「聖書に見るマリアのすがた」

オラシオ・ポホルヘ著
長沢　とき　著
女子パウロ会
６００円

4人の福音記者が、さまざまな展望のもとに捕えたマリアの姿を語っているのも、結局イエズスについて語りたいと望んだからである。彼らが語ってくれるマリアを黙想し、「すぐ来られる主、私達が待ち望んでいる主」を、ますますよく知るようにしよう。

春秋

数年前のこと、フィリピンのある貧しい人々の住む町を訪問する機会がありました。

一軒の家（家というよりは、板敷きの6畳位の一部屋と台所だけという簡素なもの）を訪問した時のこと、その小さな家には、5人の子供と夫婦が住んでいました。彼らは、突然の私達の訪問にもかかわらず、わずかの煮魚を小さく分けて、振舞ってくれました。

ジャパニーズが来たと聞きつけて、何かと話しかける子供達。食べものはないが、と言って、ギターを弾きながら、次々とラブソングを歌ってくれる青年、・・・貧しいその日暮らしの人達とは思われない、おおらかさと暖かさを持っていました。

タイの難民キャンプでボランティアをして帰って来た友人は、自分は、何も与えるものはなかった、沢山のものをいただいて帰って来た、と、ことば少なに語っていました。

教皇様訪日をきっかけに、日本の教会は、新たな転機を迎えようとしています。

しかし、相変わらず、外に向かうより、まず内部をかためるべきとの意見が多いのは、なぜでしょうか。我が身を忘れて、外に向かっている時、その人々の間に強い連帯意識が生まれます。それは、教会内の充実につながります。

私達は、もしかして逆の事に力を入れ、力が空まわりするという誤ちを犯してはいないでしょうか。（O）

お知らせ

◎今年の三教区合同司祭研修会について

神父様がたにお知らせ

隔年ごとに行ってきている浦和、新潟、仙台三教区合同司祭研修会は、今年新潟教区が当番になって開催されます。先日の打ち合わせで次のことが予定されました。正式には9月末ごろまでに各司祭宛通知しますが、一応予定に組みいれていただき多数ご参加下さい。

日時・昭和56年10月20(火)～22日(木)　2泊3日

場所・新潟県佐渡（両津市）ニュー桂ホテル

テーマ・確定ではないが教皇訪問に際して司牧者にのぞまれたことなどについて、適当な司教様に講話を依頼し、その後にグループで話し合うことなどを予定している。

＊　＊

◎軽費老人ホーム

「あけの星荘」入居者募集

かねてから建築中であった軽費老人ホーム「あけの星荘」（定員50名）が近く完成し、5月から入居者を入れるため募集しています。

入居者は、健康管理の面でも、生活指導・介護の面でもよく考慮されているので、安心して生活できます。

入居資格は、60歳以上の家庭の事情等で居宅での生活が困難な方で、日常生活に人手を要しない健康状態の方、所定の利用料（月額3万5千～7千位）の支払いができる方、保証人2名を要する人となっています。

手続きその他詳しいことは、法人事務所（電95－4751）にお問い合わせ下さい。

どくしゃのへえじ

教皇様ご訪日に接して

(2)

木戸清吉（野田町教会）

去る2月24日、日本において、初めて教皇様をお迎えして行われた野外ミサに、深い恵みを感謝致し参加いたしました。

ミサは、特に教皇様のご意向により、「平和を願って」捧げられましたが、いまわしい戦争を再びおこさないよう、心から祈りました。

私達は、憲法で戦争放棄をうたいながら、国防費の増額、徴兵制度問題など、防衛論争をくりかえし、心ひそかに戦争のイメージを求めてはいないでしょうか。

教皇様は、平和は力と力では絶対解決しないことを、はっきりと示されました。それがどうして守られないのでしょう。

これは「正当防衛」「しかし」「けれども」などをつけ加えて、都合よく言いわけをつくり、2千年も平和の光に背をむけてきたのはなぜでしょうか。

このたびの教皇様の来日により、平和の役割を考えなおす絶好の機会が与えられたと思います。平和は待っていても来ません。

平和を築く努力ができますよう、日夜主の導きを願って生きたいと思います。

（野田町教会報より）

◎春の後藤寿庵祭　＜水沢＞

キリシタンの先駆者・後藤寿庵の遺徳をしのび、農民の働きの上に豊かな実りが与えられるよう祈る春の寿庵祭が5月31日(日)に行われます。当日は、朝9時半水沢市福原の公民館前から行列、寿庵廟で田畑の祝別、ミサ、親睦会が行われ、親睦会の後、教皇ヨハネ・パウロ二世の訪日の映画とビデオを上映する予定です。教区の皆様、多数御参加下さい。

◎教皇ヨハネ・パウロ二世回勅

「いつくしみ深い神」　出版

教皇ヨハネ・パウロ二世が全カトリックの司教、司祭、信徒にあてた回勅「いつくしみ深い神」が、このたび沢田和夫神父によって翻訳され、女子パウロ会から販売される。

2月にお会いしたばかりの教皇様への敬愛のまださめやらぬ私達にとって、この回勅を手にすることは、大きな喜びである。訳文もわかりやすく、種々のグループでの読書会、わかち合い等を、お勧めしたい。

【編集後記】　♣桜と共に復活祭、風薫る五月は聖母月。教会は自然の美を賛美しながら神を味わうことを教えてくれた。♣教区事務所だよりが発行されてから今月で五年目を迎える。ささやかであっても息の長いものでありたい。投稿をお待ちします。

仙台司教区事務所だより43号
昭和五十六年五月一日発行
発行所　仙台司教区事務所
〒980 仙台市本町一丁目2番12号
TEL 0222 22 7371